

2022 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	東アジア都城の形態と支配構造に関する比較研究 —中国北朝・朝鮮半島・日本の都城から—
キーワード	① 都城、② 都市、③ 木簡

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	フルウチ エリコ 古内 絵里子
配付時の所属先・職位等 (令和4年4月1日現在)	福山大学 人間文化学部 人間文化学科 講師
現在の所属先・職位等 (令和5年7月1日現在)	福山大学 人間文化学部 人間文化学科 講師
プロフィール	2016年お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 博士後期課程修了(博士(人文科学))。2016年お茶の水女子大学 基幹研究院 リサーチフェロー(2018年3月まで)。2020年独立行政法人日本学術振興会 特別研究員 PD(2021年3月まで)。2021年から現職。専門は日本古代史。日本と東アジア都城の比較研究を行っている。著書に『古代都城の形態と支配構造』(同成社、2017年)。

1. 研究の概要

本研究は、中国北朝および朝鮮半島の都城行政と平面プランからの影響という新たな視点から日本の都城形成を再検証することで、日本の都城の特質を明らかにするものである。そこで、以下の(1)～(3)を行う。

- (1) 最新の考古資料を活用し、北魏平城・洛陽城・東魏北齊鄴城の形態と支配構造を明らかにする。
- (2) 当時の海外情勢にも着目しながら、中国北朝都城がどのように朝鮮半島に伝わり、北朝都城の何を受け入れ、何をとり入れなかったのかを明確にするとともに、朝鮮半島独自の要素も明らかにする。
- (3) 日本において、朝鮮半島を経由して入った中国北朝・朝鮮半島都城の何をとり入れ、何をとり入れなかったのか、その取舍選択のあり方を通じて日本都城の特質を解明する。

2. 研究の動機、目的

本研究の目的は、中国北朝および朝鮮半島の都城行政と平面プランからの影響という新たな視点から日本の都城形成を再検証することで、日本の都城の特質を明らかにすることである。これまでの日本の都城研究は、隋唐都城との比較研究が多い。だが、日本は、中国との国交が途絶えた7世紀後半に、はじめて都城を造営している。この7世紀後半は、百済の滅亡により、王族・貴族が日本に渡来し、彼らが、もたらした知識・技術は、日本の政治・社会に大きな影響を与えた。このことから、朝鮮半島の情報をもとに日本の都城は造営されたと考えられる。そして、朝鮮半島の都城は隋唐以前の中国都城の影響を受けて形成されたものであることから、日本の都城は隋唐以前の中国都城の影響も受けていた。しかし、残存する朝鮮半島都城の史料

が少なく検証する手段がなかった。だが、近年、中国六朝と朝鮮半島の都城遺跡の発掘が進み、多くの遺物や出土文字資料が発見されたことで、文献資料では知りえない都城の様子を知ることができるようになり、疑問を解決することが可能となった。また、それに伴い、2015年には韓国内外の百済に関する文字資料を収録した『韓国古代文字資料研究』百済篇（周留城出版社）が出版された。さらに、データベースの公開も始まったことで、現在、韓国の一次文字資料を活用する研究環境は飛躍的に整っている。加えて、韓国の出土木簡から日本の出挙や戸籍制度が朝鮮半島の影響を強く受けていることが判明し、7世紀後半の日本は朝鮮半島を経由して中国の律令制度を受容していた。このような律令制度の受容と変容の中で、日本の都城形成を捉え直すことで、東アジア諸国の影響関係の中での日本の律令制度・社会の成立を再検証する新たな研究を創出できると考えた。

3. 研究の結果

北魏平城以降の中国都城は、宮城・内城・外郭城の三重構造で、唐代の都城へも受け継がれた。ところが、日本の都城は宮城と京城のみの二重構造で、朝鮮半島都城も、高句麗の後期平壤城・百済泗泚城は山城・宮城・外城（京城）で、新羅王京は宮城・京城で構成されており、二重構造であった。このことから、中国北朝都城の情報は朝鮮半島経由で都城は日本に伝わったと考えられる。一方で、朝鮮半島都城に必要な山城や宮城の構造などは、日本ではとり入れられることはなかったという違いも見いだせる。

本研究は、中国北朝都城で形成された外郭城という貴族から民（被支配者層）が集住する空間に着目し、それが6世紀の朝鮮半島に伝播して、高句麗の長安城、百済の泗泚城が造営され、貴族から民衆までが居住する都市空間の成立したことを明らかにした。また、新羅の王京は百済経由で入ってきた北朝都城の情報を受容して6世紀後半から条坊制が導入されたという朝鮮半島における都城情報の伝播ルートを解明した。この都城情報は、形態だけではなく都城に居住する貴族から民衆を管理するシステム、すなわち都城行政も含まれていた。

5世紀の北魏において内城周辺に郡県制とは別の特別行政区、すなわち都の特別行政区画である八部（六部）があり、都は郡県制から独立した特別行政区画であった。高句麗・百済・新羅では、北魏の都城形態が入ってきたことで、貴族から民衆までが集住する都市空間が生まれた。これら都城住民を管理するために、朝鮮半島都城でも地方とは異なる独自の行政がしかれた。ただし、それらはすべて中国のものをそのまま受容したわけではなく、高句麗の都城では五部制、百済の都城では五部五巷制、新羅の都城では六部里制と各国の特性に合わせたものになった。そして、660年に百済が滅亡したことにより、多くの百済貴族が日本へ亡命してきた。彼らの知識を活用して、天智朝の近江京で都のみを独立した別の行政区画とする「京」制という日本の都城行政が作られたことを明らかにした。以上から、日本の都城は、従来の研究で言われてきた「隋唐→日本」だけでなく「北魏→朝鮮半島→日本」という段階的な受容過程があったといえる。

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の「2022年度 若手・女性研究者奨励金」によって、都城形態と都城行政という複眼的視点からの日朝都城比較を行い、中国北朝から日本に至るまでの都城の受容と変容に迫ることができた。今後は、日本と同じように中国都城を継受した渤海や東南アジアと日本都城の相違について検討することで、東アジア世界における日本の都城の独自性と位置付けを明らかにする。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、私の研究に対してのご支援、心より感謝申し上げます。支援をいただいたことで、中国北朝および朝鮮半島の都城行政と平面プランからの影響という新たな視角から日本の都城形成を解明することができました。得られた結果は学術論文に投稿中である。支援していただいたことを忘れず、研究にさらに精進し、社会に貢献できるような成果を発表していきたい。